

若越郷土研究

7の3

柴田勝家の北庄城と

その城下町

松原 信之

一 北庄城築城まで

現在の福井平野は古代において足羽・日野・九頭竜諸川の乱流によつて形成された肥沃な沖積平野である。従つて奈良・平安時代の早くから東大寺・興福寺などの南都大寺社の庄園として開発され、足羽川北岸には延長二年（九二四年）伊勢神宮を分祀して、神明神社が建立されこれに前後して足羽御厨が置かれている。

この足羽御厨が後の北庄と同一のものであることは神明社縁起その他によつて明らかであり、又その庄域が足羽川北岸にのみ位置していたことは後述する如く、河南が木田庄、社庄の庄域によつて占められてい

ることから判然としている。しかし一体足

羽御厨からどうして北庄の庄名が生まれた

のかは現在文献の徴すべきものがない。た

だ足羽社記によれば「福井、福久居。当三

社ノ莊ノ北ニ之故。此謂レ曰「北ノ莊」と

する足羽社北説と大日本地名辞典「福井の

旧名北ノ庄と云い即ち足羽ノ御厨の北ノ庄

なり。」の足羽御厨北説がある。越前古名

考、越藩拾遺録などでは前者足羽社記説を

支持している様であるが、足羽社記は江戸

時代中期沈滞した社運を昂揚せんとして当

時の神官足羽敬明が著わしたもので多分に

我田引水の誇用が多いと云われているから

信じ難く、寧ろ筆者は後者の足羽御厨北説

を支持したい。即ち仁平三年（一一五三

年）東大寺諸庄園文書目録（平安遺文）に

足羽庄が見えて居り、これが足羽郡一帯の

東大寺の庄園であるとすれば、足羽御厨が

これと同義の「足羽」の混同をさけて足羽

郡の最北に位置する庄園として北庄と呼び

慣らわされたとも考えられるのである。い

づれにせよ、一般に北庄と云う地名は全国

にも字名などで数多く散見されることであ

り、殆んどが庄園時代の名残りとして地理

的位置を示すものが多いこともこれを裏付

けるものであろう。

中世以来福井地方の庄園及びその庄域に

ついて現在文献に乏しく判然としないが、

僅かに残る資料で仮説的に推論を下すこと

は出来る。即ち足羽川の南には、木田を中

心として南に延びる南都興福寺領木田庄が

あり、又足羽山東北麓石場を中核として更

に西南一帯、旧社村の地域には早くから東

大寺の庄園として開かれた道守庄があり、

後にこの地域が太平記に云う八代庄又は社

庄（朝倉文書・足羽神社文書）に変わった

ものと考えられる。

足羽御厨、即ち後の北庄の庄域について

は貞和三年（一三四七年）の神明社縁起に

「北庄三郷者……上郷者四井村、勝見、丸

山、中郷者北庄、下郷者明里村、高柳、水

越、飯塚、角折、大瀬、菅谷、境村、安

居、下市、金屋、向大瀬也」とあり、即ち

上之郷は旧円山東村一帯であり、中郷の北

庄は現在の足羽川河北の旧福井市域に当

り、下之郷は旧東安居村に該当するもので

ある。

さて天正元年（一五七三年）の「橋家文

書」に北庄三ヶ村或は三ヶ庄などの名が見

えているが、これは以上述べた北庄中之郷

北庄、社庄石場、木田庄木田の三地域が北陸道沿いに連続して街衢が発達したためこれらを総称して呼び慣らわしたものと考えられる。

福井地方集落発生の起源は足羽山東北麗と推定され、古代の足羽郷の地に当る。ここには足羽郡の郡家(郡役所)や足羽駅も置かれ、式内社足羽社や天平宝字元年越前国主惠美押勝が泰澄大師をして建立せしめたと伝えられる法相宗宝光寺など古い社寺が次々とここを中心に関連された。

一方河北の北庄地域の集落は前述せる如く、足羽御厨に起り、神明社門前集落に始まる。北庄の地名は先に述べた南北朝貞和三年(一三四七年)の神明社縁起を初見とし、当時の足羽七城の一つ、庄城もここに擬定されている。特に室町時代に入り、越前国守護朝倉氏の支族、朝倉頼景が北庄遠江守と称してこの地に居館を定めてから北庄が大きく浮び上つて来たのである。

二 北庄城構築

a 城地の占定

天正元年(一五七三年)八月織田信長によつて朝倉氏が滅ぼされたが、その後一向一揆のため越前は再び戦乱の地となつた。

天正三年(一五七五年)八月信長は再度越前に入国し一揆を平定した後、彼の武將柴田勝家に越前の中、八郡四十九万石を与えた。

当時戦国の争乱を切り抜けた各領主は大名領国の統治のために従来の山城を捨て進んで平地に居城するに至つた。天險を頼りとする山城よりは平野の交通・経済の中心となる所が結局は領邦の統治に好都合であることを知つたからである。江州長浜城(豊臣秀吉)、芸州広島城(毛利輝元)、会津若松城(蒲生氏郷)などはこの頃に建設された純然たる平城の典型である。

勝家もその居城を定めるに当つては朝倉氏の国城だつた一乗谷の山城を捨てて交通至便な北庄を選んだのである。

この地は足羽川の水運と北陸道の陸上交通路が交わり、しかも日野川、九頭竜川の水系を経て越前一国の門戸、三国湊とも連絡していた。又先にも述べた如く、中央の社寺や貴族の荘園として古来より開発され神明社、足羽社、持宝院など古社寺の建立も早くから見られて、政治・交通・文化・経済など多方面に亙つて有利な地であつた。

そもそも城郭は戦争に当つては防守攻勢の拠点ともなるものであるから、平野に進出しても軍事的施設の考慮は当然のことであり、これに関しては各領主ともなみなみならぬ苦慮があつた。まず居城を選定するに当つてどの様な地形を選ぶかが第一の要件であると共に、更に居城を選定されてからは、それらの地形を最大限どの様に利用して防備的配慮をすべきかは築城者最大の責務であつた。この時期平野に進出して建設された城郭の中には平地上の孤丘に城を築く、平山城の型式をとるものがあつた。信長による安土城、近江八幡城(羽柴秀次)、江州彦根城(井伊直勝)、伊予松山城(加藤嘉明)などの例で、越前においても丸岡城や大野城(亀山城)など典型的平山城が見られる。これは時代の風潮として城郭を山城より平野に進出せしめても少しでも攻守防備に都合のよい孤丘を選んだのである。

この中にあつて平山城として好都合の足羽山があるにもかかわらず、これに拠らずして平城を選んだことは未だ大きな疑問とされている。これは古来より式内社としての足羽社その他幾つかの古社寺がここに鎮

座していたためこの靈域を避けたのだとも考えられるが、足羽山自体が八幡山には尾根続きに等しくたとえ足羽山北東部の丘陵地に築城したとしても背後の搦手は南方からの攻勢には取り立てて防ぐべきものがないことも築城上の不安を感ずる一つであつたらう。勝家にすれば北方への護りもさることながら、何よりも野心深い彼には京都に通ずる南方に意を用いたのではないかと推定される。かくして北方に対しては舟橋を架設して備え、直接足羽川、吉野川の両河川の合流点に縄張して平城を構築したのである。

b 北庄城の規模

柴田時代の北庄城に関する記録は天正十一年（一五八三年）北庄城落城と共に煙滅したらしく現在その全貌を知ることが不可能に近いが、外部に残された僅かな資料と復元的推考によつてその輪郭を考えて見たい。

天正三年（一五七五年）八月、勝家は城地を占定すると直ちに築城にかかり、その後天正四年及び六年に再度の修理を行つて城郭を拡大している。（福井県史第一冊）天正九年頃にも未だ工事続行中と見えて、

同年四月布教のため北庄に來つた宣教師、ルイス・フロイスの本国宛の書翰（耶蘇会の日本年報第一輯）の中にも「此城（北庄城）は甚だ立派で今大きな工事をして居り……」とあり、更に天正十一年（一五八三年）五月北庄城攻撃に際して羽柴秀吉が小早川隆景及び毛利輝元に報知した書状（大日本古文書家わけ第十一 小早川家之書之一）の中にも「越前北庄、柴田居城之儀、数年相繕みといひ、城中に矢倉高く築き、天主九重に上せ候」と述べている。

この様にして勝家が国九ヶ年間は殆んど居城の経営に終始している。これは越前が一向一揆の鎮定後のことでもあり、世情不安、民心動揺の時代、特に領主の勢威誇示の必要もあつたのか、居城の経営には殊の外、意を用いたものと見られる。

この時代の北庄城拡張に當つては旧城濠城壁など可能な範囲で利用していたであろうから、慶長北庄城古図（松平氏時代）や僅かに残る記録から大体推測復元出来る。

続片鞆記に「其頃は足羽川勝見村より城之橋を経て、今の和泉町へ流れ候故、後隄の城なれば、当時鳩の御門の南の枳形は其頃の本城の跡にて、前は今の三ノ丸大鼓御

門の石垣其時の儘なる由、勝見に向河原、川田といふ字今に残れり。」といい、又越前国名蹟考にも「新川（吉野川）は中島の堀より百間堀泉町に出で、芦田屋敷辺にて足羽川に流入しといへり。北庄の古城は此落合の辺を本丸の背に當て縄張せしものと見ゆ。然るに慶長中当御城御造営の時分、中島今の滝がはなの東より斜に川筋を掘通して、外側の囲となせる故に是れを新川と称す。」とある。即ち柴田氏北庄城は旧吉野川と足羽川との合流点を背にして構築されたものである。当時の本丸は現在のダルマ屋百貨店南側一帯を占め、天守閣の位置は更に本丸の東南隅鳩御門の時の枳形と伝えられている。現在の柴田神社一帯である。明治初年漆ヶ淵附近の鳩御門址の城濠を掃除の際、濠の中から北庄城の鬼瓦が発見されていることや、ここが勝家生害の地と伝えられ昔から奇怪な伝説を生んでいることなど、これを裏付ける根拠と考えられる。尚當時の二の丸、三の丸は本丸の北及び西に配置されていたであろう。

又、前記ルイス・フロイスの書翰の中に「此城は甚だ立派で、今大きな工事をして居り、予が城内に進みながら見て最も喜ん

だのは城及び他の家の屋根が悉く立派な石で葺いてあつて、其色に依り一層城の美観を増したことである。」とあり、述中、立派な石というのは笏谷石を指すものであつて城の石垣には勿論天守、城門、武家屋敷などの屋根瓦に至るまで、この笏谷石を使用したことが知られる。これと同時に柴田勝家の築城した丸岡城にもこの笏谷石の瓦が使用されていることもこれを立証するものである。この様に北庄城の規模広大さは先の羽柴秀吉の書状にも窺われ、特に注目すべきことは「天主九重に上せ候」とあることである。天主即ち天守が史上初めて現われたのは細川両家記に見える摂津伊丹城の天守とされている。即ち室町末期に既に小規模ながら原始的な天守が出現したのであるが、天正四年織田信長の築いた安土城天守は五層七重で空前のものであつたらう。(外観五層であるが内部は七階になつてゐる)ところが北庄城天守は九重と記されており、これは多分に誇張を含めたものとしても少なく共、安土城に匹敵する広大な壮麗なものであつたことは間違いない。勝家の権勢の如何に大なるものかが偲ばれる。

三 城下町の建設

勝家の北庄城の構築と期を一つにして城下町の整備建設も着々と行なわれた様であるが、北庄城の場合と同様に何分にも資料乏しく論究が甚だ困難である。

まず侍屋敷の区劃に目を向けて見ると当時の主要武家地は後の慶長年間の絵図より推定しても松平時代の大名町一帯であろうと考えられる。神明社縁起天正七年の条に「天正三年信長公勇臣柴田勝家為二国主一從三江州長光寺一入部、北庄居城、加州兩国依レ為二国主一当社御屋敷之跡ニ侍六七十人居住之……」とあつて、当社もその境内の一部が武家屋敷に割譲せしめられたことが知られるから大名町から更に北部一帯に及び、又吉野川を越えた東部の城之橋一帯にも侍屋敷が散在したことであろう。

一方町屋のいわゆる城下町は柴田氏によつて、始めて町割が施こされ、その後堀氏に至つてはぼその概容を整えられたと見るべきであろう。急激な城下町の建設に際してはその繁栄策の一環として近郷からの社寺・民舎の集中が行なわれたことは当然である。特に朝倉氏の旧一乗谷城下よりの社寺民舎の移転するもの多く、社寺では安養寺・妙観寺・愛宕大権現・妙経寺・法興寺

・一乗寺など約十数ヶ寺に及び、この他一乗谷以外からの社寺の移転も専照寺・西光寺その他を数えている。又天正六年勝家の法興寺に与えたる禁制状によれば一乗谷引越し町と称せられる一乗町も、この頃既に北庄に一街区を形成していたことが明らかで、更に天正十三年の橋家文書によれば、この一乗町が当時紺屋商人によつて形成され、一乗町組の中核的存在であつたことすら窺えるのである。同文書中には一乗町の他、魚屋町、神明之町の名も見え、又塩町、浜町等も当時の記録に伝えられているから本町、京町、呉服町なども、これらと前後して成立したのではないかと想像される。

この様に北庄城下町はその主街を城郭の西方即ち片町呉服町一帯に有し、この他神明社前には古い門前集落から発展した神明之町が発達していたことであろう。即ち前記ルイス・フロイスの書翰の中にも「……我等は市の入口の橋(九十九橋)を通つたが、予に語つた所に依れば、尊師が都に赴かれた際通過された勢多橋と同じ長さで、当市(北庄)は又安土の二倍もあるということである。……」と北庄に付きこの

様にふれている。

しかし北陸街道の西方呉服町から三橋にかけては未だ敷地の介在する未開地もあつたらしく、藪の願乗寺、藪の法興寺の異名はこれからつけられたと伝えられている。

かくの如く建設された柴田時代の城西の旧市街はその後松平氏入部後に建設された城北の新市街とは建設時期の違いからその市街型態上にも対照的相違点が幾つか見られる。例えば城北新市街が階段状に道路の屈曲が多いのに対して、旧市街は足羽川に基線を有するため、やや斜交してはいるが、ほぼ京都市街に横した直交路状に近いこと。又若越郷土研究の4、慶長年間北庄城郭図及び町割図に就いて々にも詳細に述べた如く城郭、侍屋敷は勿論のこと、町屋地区をも含めて、堀・土居を以つて囲繞するいわゆる当時の特色たる邑城形式をとつていたことが明らかとなつた。

四 勝家の交通整備

勝家の越前国領有と共に、北庄と安土及び京都との交通を便にするため、板取より中ノ河内通りの山路を切開いて東近江路を通ぜしめ（越藩拾遺録）、又九頭竜川にも舟橋を架すなど交通路の整備には多大の業

績を残している。

北庄城下町の経営の一環として特に注目すべきことは九十九橋の架橋である。従来足羽川は舟渡し、もしくは橋があつたとしても小規模なものだつたらう。木戸文書によれば勝家の奉行徳庵聞下斎より石屋大工彦三郎宛てたる制状に「二十一人有之、石屋内十人はきた橋を大急に可切之、残十一人は右引所へ可遣旨御提候、但きた橋出来候間、私仕事於在之者可令加三御成敗之旨被三仰出一候条、二十一人之者共堅可ニ申付一者也」とあり、此きた橋は即ち大橋のことであるが、五月二十三日とのみで年紀を逸しているため何時架橋されたか不明である。しかしルイス・フロイスが既に天正九年渡橋しているから恐らく城下町の建設と併行して河南の石場町との連絡を便にするため永久的な架橋を見たものであらう。九十九橋に関しては帰雁記を始め、和漢三才図会、東遊記その他に記載されて居り、古来より半疋半杠の奇橋として知られている。即ち北庄町側半部を木造、石場町側半部を橋柱、板、欄干に至るまで石造りの名橋であつた。これは北庄町と石場町との境をなすがためのもとも伝

えられているが、結局は戦時の折撤去するにも又復興する際にも容易なためいわゆる軍事上防禦の見地からのものである。さて当時南方から北庄へ入る北陸道は従来八幡山、足羽山麓をめぐる迂回路であつたものを木田辻町から一直線に花堂・浅水へかけて今日の如き北陸道を開いたのも恐らく、この勝家の交通整備の一環として行われたと考えられる。

（高志高校教諭）